漢詩を味わう

第106回

勧酒　于武陵（うぶりょう）

勸君金屈巵　君に勧む　金屈巵（きんくつし）
満酌不須辭　満酌　辞するを須（もち）いず
花發多風雨　花発（ひら）けば　風雨多し
人生足別離　人生　別離足（た）る

さあ、さしあげよう、この金色に輝く大杯を。
なみなみとつがれたこの酒、遠慮せずに飲みほしたまえ。
花が咲くころ、とにかく風雨が多いものだ。
この人生には別れがつきものだよ。

《金屈巵》黄金製の把手のついた贅沢な酒器。
《満　酌》なみなみと酒をつぐこと。
《　足　》いっぱいある。多い。

于武陵（七〇一―七六一）は晩唐の詩人で、杜曲（陝西省西安の南郊）の出身です。宣宗の時代四十歳前後で進士に及第しましたが、官界の生活が性に合わず、書物と琴を携えて各地を放浪しました。常に孤高の気概を保ちながらも、栄誉や栄達は望まなかったといわれます。洞庭湖や湘江一帯の風物を愛し、晩年は嵩山の南に隠棲しました。金屈巵について、宋時代の書物「宋会要」に「三仏斉国が真珠・龍涎・珊瑚・瑠璃などとともに屈巵・小屈巵を献上した」とあり、この詩に登場する金屈巵も西域から輸入された贅沢品だと思われます。詩の前半は、この贅沢な器になみなみと酒が注がれ、豪勢な宴の雰囲気を盛り上がります。後半に入ると一転して、花が開けば雨が降ったり風が吹いたりするものだ、とつぶやくように語りかけます。そして人生の別離の嘆きを直截的に述べて詩を締めくくっています。「一期一会（いちごいちえ）」の華やかな宴の裏に、出会いには必ず別離があるという「会者定離（えしゃじょうり）」の無常を感じさせます。
井伏鱒二の訳詩「厄除け詩集」のなかにこの妙訳があることは有名です。

コノサカズキヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミツガシテオクレ
ハナニアラシノタトエモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ

この訳には「金屈巵」という語のもつ絢爛豪華な気分が訳されていないため、特に後半がクローズアップされて哀愁の色が濃くなっているようです。

参考文献：唐詩鑑賞字典（東京堂出版）・漢詩の字典（大修館書店）・唐詩選（岩波文庫）

岐王の宅裏 尋常の見　崔九の堂前 幾度か聞く　正に是れ江南の好風景　落花の時節 又君に逢う

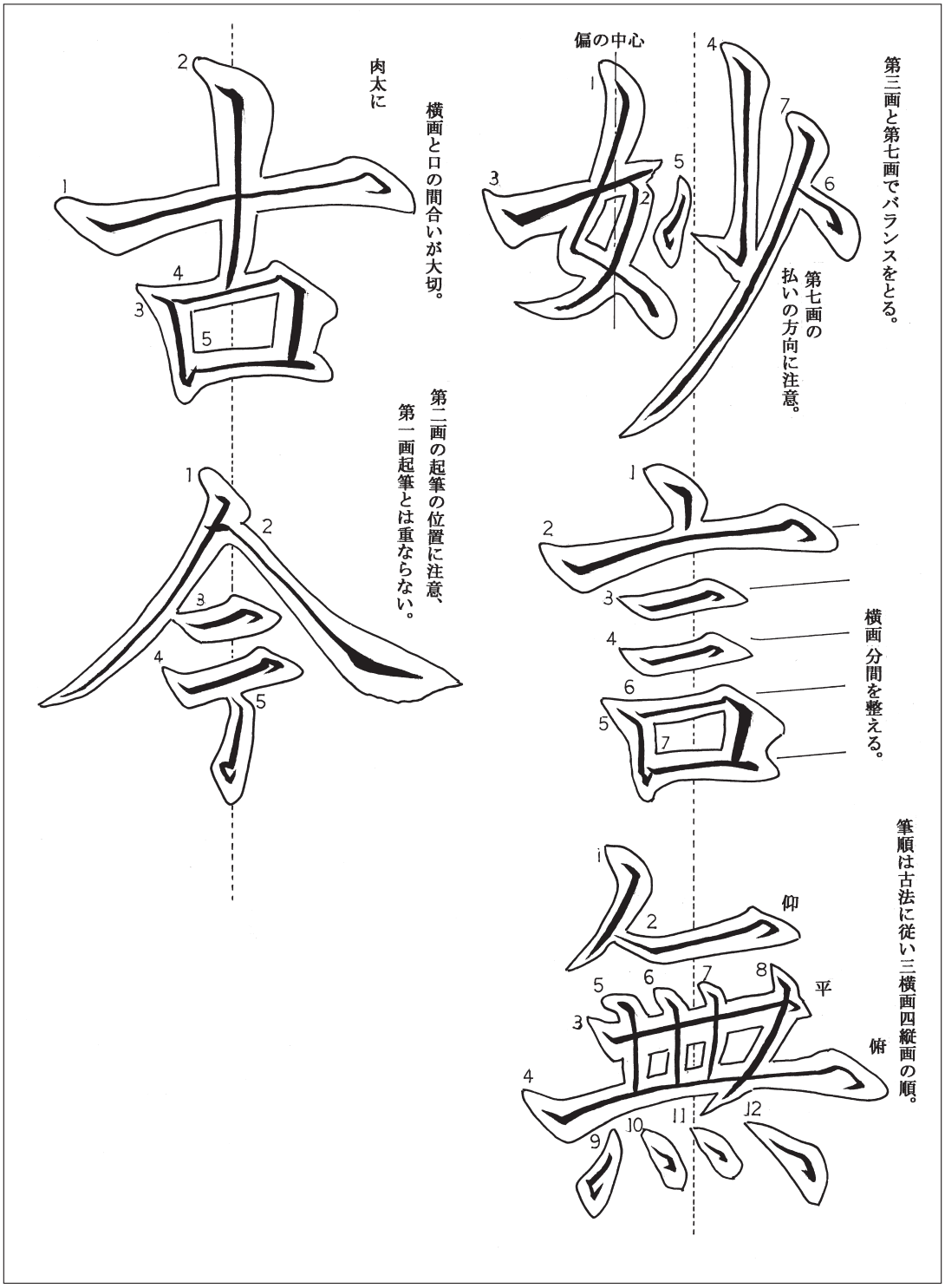
《大意》岐王さまのお宅ではいつも逢ったものだった。崔九どのの座敷でもたびたび聞いたものだった。今この江南の好風景。花散る時節にまた君に逢おうとは。（杜甫詩・江南にて李亀年に逢う）※李亀年 ―― 玄宗皇帝の寵をうけていた有名な歌手

変ずれば則ち通ず

《大意》従来の主義主張を変更することによって行き詰まりは打開される。（易経）

読み　妙言に古今無し（すぐれた言葉は古今を問わない・張元彪）

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

草　書

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

足を萬里の流れに濯う

ペン字部課題　（5月31日〆切）

細字部課題　（5月31日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲書

音　ジンジインソク　ゾウジフツリ

略解　仁慈はいつくしみ情け深いこと。隠惻は情厚いこと。造次はしばらくの間。寸時も仁慈隠惻の心から離れてはならないこと。

北原白秋

和泉溪石先生書

支部	順位	氏名

漢の為に道を定め、自……

■禮器碑（後漢・西暦一五六年）の臨書（6）

象雲臨

『為漢定道自』

禮器碑は山東省曲阜の孔子廟の碑林に現存しています。曲阜は孔子の生誕地で孔廟碑林（石刻石碑陳列所）には、以前勉強した「史晨碑」や「乙瑛碑」などの後漢の代表的な隷書碑をはじめとして、四十六点の碑が保存されています。

中国では、碑面の保護のために現在では殆どの碑が採拓できませんが、残された拓本では、碑の傷みや摩滅の進んでいない古い時代の拓本がよいということになります。この禮器碑の現在出版されている碑帖は明末以降に採拓されたものが殆どで比較的新しいものですが、碑面の傷みにより佳拓が少なく、多くの個所が欠損しています。今月の「道」の左部分などがそうですが、拙臨では他字から類推して臨書しています。

■王羲之・蘭亭序（東晋三五三年頃）の臨書 (31)

文に臨んで嗟（悼）せずんば……

象雲臨

『不臨文嗟』

今月の四文字は、蘭亭の諸本を見比べると大分趣きが違っています。本欄で掲載している蘭亭八柱第三と呼ばれる真蹟系の馮承素摹本では「不」の筆路が不自然です。参考まで、左に褚遂良の臨本といわれる蘭亭八柱第二と、虞世南臨本の刻本といわれる（一説に褚遂良系とも）張金界奴本の二つを掲げます。他の字にもそれぞれ筆路に違いがあり、雰囲気も大分異なっています。馮承素摹本は筆先の動きまで明快かつ繊細で、書家によっては想像の入る余地がないため楽しみが少なく嫌う人もいます。皆さんの好みは如何でしょうか。

蘭亭八柱第二

張金界奴本